

裸体への意志

——第三帝国におけるヌードとセクシュアリティ——

田 野 大 輔

はじめに

1938年10月、宣伝省幹部で親衛隊准将のハンス・ヒンケルは、ベルリンの喜劇俳優ヴィリー・シェファースが寄席の司会で次のように発言し、会場をどっと沸かせたことを苦々しく報告している。

うちのヌード・ダンサーは今日は自宅待機です。というのは、二度も『黒色部隊』の紙面を飾る気はないからです。みなさんがその記事をご覧になったかどうかわかりません。どうやらご覧になっていないようですね。でもそれは、この新聞が編集部の考えているほど広く読まれていない証拠です！ そう、こうしてうちのヌード写真が無料で新聞に載るわけです。といっても、私の写真じゃなくて、もちろんダンサーの写真ですよ¹⁾。

発行部数50万部をこえる親衛隊の機関紙『黒色部隊』への露骨な嘲笑に、報告者は我慢がならなかったようだが、それ以上に注目されるのは、反体制分子への過激な中傷で知られるこの新聞に女性のヌード写真が掲載されたという事実、しかもそのことが会場を沸かせる笑いの種になりえたという文脈の存在である。風紀取り締まりに容赦のない厳しさを臨んだはずの親衛隊の機関紙が、攻撃の勢い余って扇情的な写真の流通に一役買ってしまったという皮肉な事態が、聴衆の笑いを誘う一因となったわけである。

とはいうものの、一般に考えられているのとは異なり、「健全なる民族感情」の執行人たる親衛隊にしても、社会生活にはびこるエロティシズムを一掃するつもりはなかったし、宣伝省をはじめとする検閲当局も、映画や出版物におけるヌードの使用を黙認していた。この時代の人々がヌードをタブー視しておらず、むしろそれをあけすけに楽しんでいたことは、ドイツ随一のグラビア紙『ベルリン絵入り新聞』の紙面に目を通せば、おのずと明らかとなる。発行部数150万部を誇

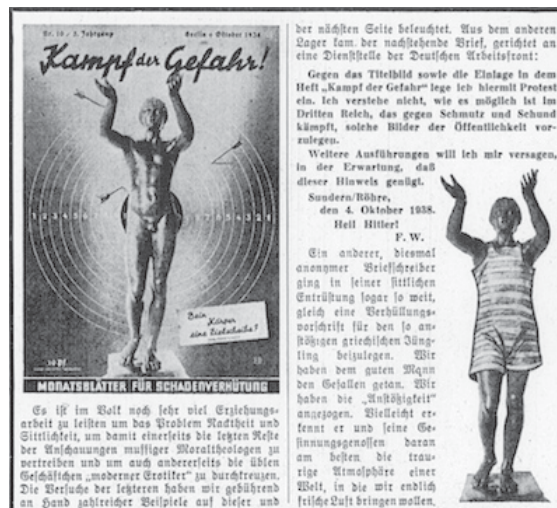
る同紙の映画・演劇の紹介欄には、たびたび肌を露出した女性の官能的な写真が登場する²⁾。映画や舞台の紹介に名を借りた女性のむきだしのエロティシズムは、退廃的なキャバレー文化を彷彿とさせるものさえあったが、それだけにいっそう、刺激に飢えた男性読者の視線を惹きつけ、重苦しい現実を忘れさせてくれる一服の清涼剤となったにちがいない。

こうしたヌードの氾濫は、しかしながら、センセーションをもとめる読者の欲求への迎合、ある種のガス抜きというだけにはとどまらなかった。なぜなら、ナチ党内には他方で、帝政期以降に興隆した裸体文化運動の影響のもと、衣服をまとわない裸の肉体を健康美の象徴、北方人種の理想型として礼賛する勢力が存在したからである。彼らが賛美したのは、官能性を払拭した「美しく純粋な」裸体であったが、生の喜びを謳歌するその若々しい肉体は、映画や出版物にあふれるエロティシズムと容易に混同されるおそれがあり、そのちがいの曖昧さこそ、上述のようなヌードの氾濫を招いていたのだ。そうすると問題は、崇高なヌードと猥褻なヌードをどう区別すべきかということになるはずだが、この点をめぐっては、ナチ党内に明確な基準が存在したわけではなく、検閲当局の対応も明らかに混乱していた。こういう状況のもとで、健康美と猥褻さの間の線引きは実際にはどのように行われたのだろうか。そもそも、そんな線引きは可能だったのか。

このあたりの微妙で複雑な実情を明らかにするために、本稿では第三帝国におけるヌードの位置づけを、裸体文化運動への賛否両論含めた反応を手がかりとして考察するとともに、多様なメディアを通じたヌードの氾濫の意味を、この時代のセクシュアリティのありかたと関わらせながら論じてみたい。

裸体への黒い情熱

シェファースが言及していたのは、寄席の一週間前に『黒色部隊』に掲載された写真入りの論説であった。「真の高貴な裸体のために」と題するこの論説は、日



図版1 『黒色部隊』の記事（1938年10月20日）
「美しく純粋な」裸体と「破廉恥な商売」の対比、服を着たギリシア彫刻。

光浴をする「美しく純粋な」女性と、「破廉恥な商売」に従事する女性のヌードをそれぞれ全面で掲載し、両者を対照的なものとして扱っている³⁾。衣服を脱いだダンサーの淫靡な肉体が、褐色の肌の健康的な少女の裸体とまるで別物であることは、誰の目にも明らかではないかというのである。

ここに提示された婦人、そのポーズや身ぶりがあるの気品にみちた少女と異なることは、澄みきった砂丘風景の「環境」がキャバレーの赤いピロードの雰囲気と異なり、海にふりそそぐ昼光が劇場の舞台装

置のスポットライトと異なり、少女の肌の光沢ある褐色が真っ白な化粧と異なるのと同様である。

とはいえ、この論説が強調するほど両者のちがいが明白かという、必ずしもそうは感じない読者がいてもおかしくないと思われる。「美しく純粋な」女性もまた、その肉体を露出していることにはかわりもなく、「破廉恥な」ダンサーとはちがったかたちであれ、明らかに性的な魅力を発散しているからである。そうした反応を想定してか、論説は威嚇的な口調でこう釘をさす。

健全な感覚をもっている者なら、形式張らず純粹にのびのびと提示された少女の体を見ても、あまりの美しさと気取りのない自然さへの喜び以外のものを感じないだろう……。下劣な人間だけがその際、あらゆる自然な物をナイトクラブの赤い薄明かりに染める好色家の眼鏡をかけるのである。

論説はこう主張して、「美しい肉体の純粹で高貴な裸体性」を好色なまなざしから守ろうとするのだが、実はここでは、少女の体に欲情する男性読者の卑猥さだけが問題とされていたのではなかった。むしろそれ以上に激しい敵意を向けられていたのは、裸体の美を浅薄なエロティシズムと同一視し、その猥褻さに道徳的な非難を浴びせる「俗物の上品ぶりと偽善的な憤激の喜び」にはかならなかった。いわく、健全な肉体の美しさを理解しない反動的な道徳家たちが、女性が裸で日光浴をするのを見て憤慨するのは、そこに純粹な喜び以外のものを感じるからである。こういう下劣な連中が裸体の非道徳性を攻撃するのは、それこそ恥知らずな猫かぶりではないか。新しい時代が要請しているのは、自然のままの裸体に最も高貴な美しさを見いだす人間であって、そうした美の理想にけちをつける偽善者どもは、断固として粉碎しなければならない。「われわれの健全で自信にみちた世界観は、あらゆる上品ぶりの天敵である」。

ただしこの論説は、「かびくさい市民道徳」への攻撃に乗じて、公然と猥褻なヌードを垂れ流す商売熱心な「芸術家たち」にたいしても、批判の矛先を向けるのを忘れていなかった。こうした手合いは厚かましくも「国家の文化意志」を担ぎだし、「誤った上品ぶりの束縛から民族を解放すること」を使命と考えているが、それはまったくの見当ちがいで、「われわれの時代の健全な努力と自然な姿勢を誤解しているこれらの不当利得者たちは、趣味の悪いアウトサイダーであるばかりでなく、ナチズムの世界を攻撃するための武器を敵に渡す害虫である。……この種の害虫には、もっぱら警察だけが役立つ」。裸体の美にたいする健全で自然な感覚を喚起するため、論説はこうしてある種の二正面作戦を要求することになる。

裸体性と道徳の問題のため、そして一方ではかびくさい道徳家の見解の最後の残滓を一掃し、他方ではまた「現代の好色家」のいかげわしい小遣い稼ぎを抹殺するため、民族においてさらに多大な教育活動を行うべきである。

いずれの敵が重視されているかは、一目瞭然だった。同じ論説は、ある雑誌の表紙を飾る裸体彫刻に苦情を寄せた「かびくさい道徳家」の手紙を紹介し、「汚物と粗悪品に反対している第三帝国において、そうした写真を公衆に提示することがどうして可能なのか、私には理解できない」と述べる差出人のせせこましい考えを嘲笑にしている。この「あまりにも不快な」裸体に憤慨した別の人物は、これに着せる服の図案まで送ってよこしたという。そこで編集部は陰險な悪ふざけぶりを発揮して、この善良な男の願いをかなえてやろうと、服を着たギリシア青年の姿を紙面に登場させた。論説は読者の共感をあてにしつつ、得意げにいわく、これを見れば、「われわれがいま新鮮な空気を送り込もうとしている世界のみじめな雰囲気は理解できるはずである」⁹⁾。

ところで、『黒色部隊』が裸体を擁護する論説を掲載したのは、これがはじめてではなかった。ブルジョワへの憎悪にみちた攻撃で読者を集めた同紙は、たびたびこの問題を取り上げ、裸体の美しさを理解しない頑迷な道徳家たちを槍玉に挙げていた。そのやり口はいつもだいたい同じで、親衛隊の賛美する「美しく純粹な」ヌードを道徳的に非難する声を耳にするや、時を得たりとばかりに声の主に襲いかかって、その偽善的な上品ぶりと下劣な意図を暴き立てるというものだった。たとえば、ある保守派の論客がナチ党公認の農民カレンダーに掲載された女性のヌード画を「裸体文化のプロパガンダ」として非難したとき、『黒色部隊』の記者はこれに猛然と反論して、この高貴な肉体をけなすことができるのは「墮落した好色家」だけだと主張している。この種の俗物どもは、「若い母親の威厳」を感じるができないばかりか、女性を不純で卑しい存在へとおとしめることで、「ドイツ人の品位を汚し、美しいもの、高貴なものすべてを計画的に破壊すること」をめざしている。健全な感覚をもったドイツ人なら、純粹で美しいものを見て罪を感じたりはしないはずだというのである⁹⁾。

これと同様に、ナチ党機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』がヌード画を掲載したことに憤慨し、「裸体文化」を導入しようとするものではないかと苦情を寄せてきたある牧師にたいしても、『黒色部隊』は即座に応酬して、「裸体がいつの時代も人間の表現芸術の最高の目標と見なされてきた」ことは明らかであり、「裸体、とりわけ女性の裸体は高貴ではなく、不快で卑しいものである」という牧師の姿勢は、「異端審問時代の不健全で偏狭な思考形態」にすぎないと

一蹴している⁶⁾。さらに辛辣な批判が展開されたのは、あるカトリックの司祭がナチ党人種政策局発行の雑誌『新しい民族』のカレンダーの販売に異議を唱えたときで、『黒色部隊』の論説は、このカレンダーに収録された写真に猥褻さを見いだすことこそ問題ではないかと嘯みついている。赤子に授乳する若い農婦の写真を挙げていわく、「最も放埒な『女たらし』でさえ、こうした姿を見れば沈黙し、敬虔な気持ちにかられたものである。健全な人間がその際、どうしてほかのこのことを感じえただろうか」。この美しい母親の姿を非難する輩は、みずからのなまめかしい想像に不快さを感じているだけであって、彼が見ているのは、ナイトクラブで踊る女性の卑猥な露出なのだ。「だがここで猥褻なのはどちらか。写真か、鑑賞者か」⁷⁾。

直接の批判相手は異なるものの、これらの論説がいずれも肉体蔑視の黒幕として挙げていたのは「外来の教え」、つまりキリスト教で、これにたいする執拗な攻撃は、『黒色部隊』の裸体礼賛がたえず教会批判と表裏一体をなしていたことを示している。同紙はきわめて率直に、「裸体の不道徳と戦うだけでは飽き足らない教会の『道徳熱狂者』に反対を表明し、キリスト教の「中世的で陰鬱な」教義が「あらゆる自然な肉体の衝動、すべての健全な性生活を神に敵対するものと説明」するのにたいして、ナチズムの「北方的な」世界観はこれとは逆に「力強く生を喜ぶ」ものだと主張している。「われわれは、ゲルマンの先祖の健全な感覚へ回帰したことを誇りに思っており、それゆえ新たな国家は、来るべき世代の人種的・肉体的健康にまったく特別な配慮を払うのである」⁸⁾。教会が抑圧してきた人間の肉体にしかるべき地位を与え、北方的な生の感情にふさわしい人種的な美の理想を表現することで、民族の再生をはからねばならないというのである。もともと、『黒色部隊』の論説によれば、教会もつねに肉体を蔑視してきたわけではなく、かつては肉体の自然な美しさのなかに神の啓示を見いだす真の芸術を奨励していたのだが、しだいに健全な感覚を失い、民族の生に害をもたらすようになった。その道徳的な墮落ぶりは、みずからは女性聖人の裸体像を崇拜しながら、外部のいかなる裸体の提示にも反対するという二重基準にあらわれているという⁹⁾。これにたいして、ナチズムは今日ふたたび高貴な肉体を自然な形態で提示しようとしており、それは「われわれの民族の肉体的高貴さと美への本能を根絶すること」に貢献したあの上品ぶりとは無関係である。そして、この「美しく純粋な」肉体の理想像を提示することこそ、芸術の使

命にほかならない。「ギリシア人が北方の肉体を調和のなかで提示することを理解していたように、彫刻と絵画においてドイツ民族の理想に応じることまた、われわれの芸術の課題となろう」¹⁰⁾。

『黒色部隊』はさらに、肉体の表現において何が重要であるかを説明する。いわく、金髪碧眼の美しい人間を模範として示すだけでは十分ではない。外面的な属性のみを強調する皮相な「人種物質主義」は、民族の健全な本能を墮落させる危険性がある。そうではなく、「高貴な精神と完璧な肉体の一致という模範、いつの時代もわれわれの民族に政治的・文化的な創造行為の最も強力な刺激を与えたあの人種像」を提示しなくてはならない。「北方における裸体性は、それがより高い神的なものの啓示であり、肉体によって永遠の不死のものが輝くときにのみ、説得的なものとなる」からである。

裸体および北方人種型の描写において重要なのはむしろ、いきいきとした美しさを本来の意味で明示し、顕現させることであり、根源的で神に似た人間の最も純粋かつ直接的な表現を見だし、形態化することである。こうしてはじめてそれは有効な教育手段となり、わが民族に道徳的な力と、民族の偉大さと、さらには再生しつつある人種的な美とを教えることができるのである¹¹⁾。

「空疎な肉体性の賛美」ではなく、「いきいきとした美しさ」をもった裸体だけが人種教育の手段たりうるというのだが、それではなぜ裸体でなくてはならないのかという当然の疑問にたいしては、『黒色部隊』はさしあたってごく簡潔に、裸体がいつの時代も「およそ考えうる芸術的創造の最高の表現対象」だったからだと回答する。偉大な芸術家は、隠し立てのない裸体の描写をもって「人間の美の感覚の完全な形態化」をなしとげたのであり、システィナ礼拝堂のミケランジェロの天井画を見れば、教会もかつてはたくましい裸体を賛美していたことは明らかではないかというのである。こうした見地から、同紙は芸術と裸体の関係を次のように特徴づける。すなわち、ドイツ民族にとって芸術は「文化生活の、そして国民の永遠性への意志の最高の表現」であり、その形態化の意志の対象として、芸術が「創造主の最も完全な作品」である裸体を選ぶことは当然ではないかと¹²⁾。

だが『黒色部隊』が裸体を賛美した究極的な理由は、実は別のところにあった。すなわち、裸体文化運動の

影響がそれである。裸の肉体に健康で自然な美しさを見だし、これを北方人種の理想像として賞賛するという姿勢は、まさにこの運動が帝政期以来ずっと堅持してきたものだった。教会や保守派の代弁者がナチ党による「裸体文化」の奨励を非難したとき、『黒色部隊』が猛然と反論せざるをえなかったのも、そこに一面の真理が含まれていたからだろう¹³⁾。実際にも、同紙は裸体文化運動の基本理念を踏襲しつつ、自然のなかで衣服を脱ぎ捨て、全裸で日光や水や空気に触れることの健康上の意義を強調していた。いわく、人間の肉体は「裸で隠し立てのない」状態が自然で、覆い隠された状態が例外なのであって、「あらゆる裸体、自然な状態における裸体は、真正であるとともに高貴である」。体を覆う衣服は、人間を自然から疎外する境界であり、日光、空気、水が及ぼす神聖な力を封じ、自然な循環を阻害することで、人間を何世紀にもわたって墮落させてきた。いまやわれわれは、みずから衣服の拘束から解放し、「健康で美しい」人間へと脱皮しなければならない。こうした「裸体の自然で道徳的な価値」が認められれば、ドイツ民族は最高の力を手にすることになるだろうというのである¹⁴⁾。

そればかりか、『黒色部隊』はまた、裸体文化運動の指導者ハンス・ズーレンの著作『人間と太陽』を絶賛し、「肉体文化と人種健康の相互関係を最も重要なものとして認識し、われわれの民族、いや北方人種全体の存立を脅かしている自然疎外を克服するための前提をつくりだしたこと」を、その功績に数えている。新しい国家の肉体教育には、「われわれの人種の本質的な基本特性」であった「あの典型的に北方的な肉体感情を喚起すること」が必要だが、これに寄与するのが「ズーレンによって生みだされた裸体文化」で、「それがわれわれの民族の健全化にとって巨大な価値をもつこと」、「裸体文化がドイツ民族の将来の運命と内的に結びついていること」に目を向けなければならないという。もちろん、臆面もなく裸体文化を中傷する「不平屋や道徳説教者」もいるが、それは「彼らの古くさい心情が、あらゆる肉体文化にとって自明の前提をなす裸体性を『卑猥』だとか、『非道徳的』などと感じるからにすぎない」。ここでもまた、例によってあの威嚇がくり返される。「裸の肉体はそれじたい、けっして非道徳的に作用することはありえない——鑑賞者のみずからの歪んだ感覚にもとづいて、そこに卑猥な考えを持ち込むのでないかぎり」¹⁵⁾。

とはいえ、親衛隊の機関紙がいくら声高に裸体文化を擁護したところで、これを猥褻であると非難する声

はやまなかったし、それどころか、ナチ党内でも裸体文化に理解を示したのは比較的少数にすぎず、多くは依然としてそこに風紀紊乱の危険性を見だしていた。全般的に見て、裸体文化運動にたいするナチ党の態度は両義的で、そこに新時代の福音を見いだす声があるかと思えば、法的措置を講じてその撲滅をはかる動きも存在するなど、きわめて混乱した様相を呈していた。そこで次に、ナチ政権成立後に裸体文化運動が直面した賛否入り交じった複雑な反応を検討し、第三帝国におけるヌードの位置づけをさらに明確にしていきたい。

裸体文化運動の影響

すでにヴァイマル期から、裸体文化運動は風紀紊乱として国家や教会の取り締まりを受けていたが、ナチ党の権力掌握後、裸体文化を禁止する政令が公布され、警察による監視が強化された¹⁶⁾。プロイセン内務大臣ヘルマン・ゲーリングの1933年3月3日の政令は、裸体文化運動をドイツ国民への道徳的脅威として断罪するものだった。

ドイツの文化と風紀にとっての最大の危険の一つは、いわゆる裸体文化運動である。ますます多くの、とりわけ大都市の住民が、太陽と空気と水の治癒力を身体のために利用しようと努めているが、国民の健康にとってそれがいかに歓迎すべきこととはいえ、いわゆる裸体文化運動は文化的錯誤であり、断固として拒絶されなければならない。裸体文化運動は、女性においては自然な羞恥心を抹殺し、男性から女性への敬意を奪い、それによってあらゆる真の文化の前提を破壊する。それゆえあらゆる警察当局は、国民運動によって発展した精神的な力の支持のもと、いわゆる裸体文化運動を根絶するためにあらゆる警察的措置を講じるべきである¹⁷⁾。

ナチ党内の保守派は当初、ヴァイマル期の性的退廃を浄化しようとする目的から、裸体文化運動の撲滅を要求していた。この政令によって、裸で水浴を楽しむ男女のグループは警察の監視下に置かれ、公の場での活動を禁じられた¹⁸⁾。しかも警察当局は、裸体文化団体が国家に敵対的なグループ、とりわけマルクス主義者の巣窟をなしているとの疑念を抱いていた。裸体文化運動はもともと民族主義的な青年運動から発生したが、ヴァイマル期にはアドルフ・コッホがマルクス主義的・共産主義的な活動を展開し、道徳面でも自由恋

愛を唱えるなどしたため、保守派の攻撃の対象となっていた¹⁹⁾。そうした意味で、ナチ政権下での裸体文化の弾圧は、ヴァイマル共和国の道徳的・政治的荒廃を克服しようとする意志のあらわれだったといえる。

だが警察の取り締まりは徹底せず、裸体文化運動はその後活動をつづけた。それは一つには、裸体文化団体がみずから民族主義的な性格を鮮明にすることで、ナチ体制への適応をはかったためである。1933年5月には「民族主義的裸体文化闘争連合」、後の「肉体訓練同盟」が設立され、指導者カール・ビュックマンのもと、「理性に即した生活態度、野外生活によるメンバーの肉体鍛錬、ハイキングとスポーツ、民族の人種的育種への寄与、種にふさわしい文化の奨励」が目標に掲げられた。この団体は帝国スポーツ指導部に編入され、スポーツ団体として活動の基盤が与えられただけでなく、1934年1月には帝国国民健康委員会のメンバーとなり、ナチ体制の人種政策の一翼を担うこととなった²⁰⁾。この「強制的同質化」された裸体文化団体の成立によって、裸体文化を禁止する決定はすぐに覆され、その活動が全国でふたたび認められるようになった。そもそも、ゲーリングの政令は全国一律の規制ではなかったため、地方レベルでは警察の規定が個別に適用され、対応がまちまちにならざるをえなかった。そのため、たとえばテューリンゲンでは、1934年1月に裸体文化を制限する警察的措置が撤廃されたし、アンハルト、ヘッセン、メクレンブルク、ブラウンシュヴァイクでは、裸体文化が事実上自由化された。プロイセン、バーデン、バイエルン、ヴェルテンベルクでも、部分的な規制が加えられただけだった²¹⁾。地方警察当局は、裸の男女が人目につかない場所で活動しているかぎり、これを黙認することが一般的になった。もっとも、これで裸体文化運動への疑念が払拭されたわけではなく、警察当局による搜索や弾圧もなくならなかった。1939年の肉体訓練同盟の映画上映会を内偵したゲシュタポの報告によれば、上映会の様子には「マルクス主義的・同盟的傾向」が見られ、参加者にも「かつてのマルクス主義的裸体文化同盟や生改革者のメンバー」が多かったが、メンバーにマルクス主義との直接の関係は認められなかった。報告は結論として、裸体文化は「わが民族の新たな道徳観念」をもたらしえないと指摘している²²⁾。

他方、裸体文化運動はナチ党指導部内に一連の有力な支持者を獲得していた。総統代理ルドルフ・ヘス、帝国農民指導者リヒャルト・ヴァルター・ダレー、ナチ党人種政策局長ヴァルター・グロスらがそれで、彼

らは健康で人種的に純潔な民族の創出というナチズムの人種政策的目標の実現をはかり、裸体文化をその課題にとって決定的なものに見なしていた。なかでもヘスは、裸体文化運動への明確な支持を表明し、マルクス主義との本質的なちがいを強調している。

様々な、たいていは教会の側の人々は、裸体文化同盟がしばしばマルクス主義的に汚染されている事実を、そのような同盟にたいする国家や党の一般的な態度表明のために利用しようと試みている。私見によれば、党と国家はそのような態度表明にせきたてられる理由はない。疑いなく、裸体文化の領域でのこれまでの現象は、明らかになっているかぎり、喜ばしいものとはいえない。周知のように、たいていの団体は純粋にボルシェヴィズム的な団体であった。だがそれとならんで、ばらばらな小さく理想的で立派な申し分のない同様の民族主義的団体が存在した。しかも、裸体文化運動の根本思想は健全で、自然に即した自然にもとづく革新運動の観点から歓迎すべきである。

こうしてヘスは、「運動の奨励すべき根本観念を清潔で純粋に実現しうる方法」を見いだすべきで、これを禁止したり拒否したりするべきではないと結論づける²³⁾。裸体文化運動とマルクス主義の関連をめぐる疑念は教会の中傷によるものにすぎず、ナチズムはそうした疑念を払拭して裸体文化運動を積極的に擁護すべきだというのである。

同様にグロスもまた、「ナチズムの生の感情全体が自然に即した自然にもとづく人間の姿勢をめざしている」との立場から、これに寄与する裸体文化運動を擁護し、国家による取り締まりの不当性まで訴える。「裸体文化の全般的な禁止は、この運動のメンバーの生活への国家の強力な介入を意味することになる。この介入は、公衆と民族の利益にとって必要であるときにのみ、正当化される。こうした必要性は、所与のものを見なすことはできない」。裸体文化団体の活動が公の視線から守られていさえすれば、一般人の感情を害したり、反道徳的な影響をもたらしたりすることはありえず、その活動は個人の自由にゆだねられるべきだというのである。注目されるのは、こうした主張が人間の肉体を隠すべきものと見なす教会への批判と結びついていたことである。「肉体の蔑視、教会の発展から理解できる裸体の罪深さの観念、裸体はそれじたい必然的にエロティックなものであり、多くの人々

に提示された場合、卑猥な感情を喚起するという見解は、今日でも何百万もの国民同胞にとって理解できるかもしれないが、革命的なナチ政権の法律文書によって未来永劫正当化されてはならない²⁴⁾。人種政策局長のこの発言は、人種主義とセクシュアリティの交点としての裸体文化の重要性を照らしだしている。

裸体文化団体の側でも、肉体を蔑視する教会の姿勢と、その影響を受けた警察の干渉にたいして、くり返し異議が唱えられた。肉体訓練同盟の指導者ビュックマンは、裸体文化の禁止を支持した内務省の警察係官がカトリックの側に立ち、「原罪やとりわけ肉体の罪深さの思想」にとらわれているため、「真に民族主義的な立場から精神と肉体の統一を強調し、肉体と精神の規律正しい生の形成の可能性と、わが民族の育種の可能性を信じている運動」に関する決定を行うのにふさわしくないと主張する。「ゲーリングの政令が及ぼす破壊的な影響を顧慮して、党および帝国の立場から、ドイツ人が肉体を覆い隠すことなく、生まれたままの姿で、ドイツ肉体訓練の旗印のもと、公衆の目に触れないところならどこでも、人間を治癒し強化する自然の力に身をゆだねる権利を、できるだけ早く明確に認めるよう要請する²⁵⁾。肉体訓練同盟のメンバーたちは、たえず裸体文化の実践の余地をもとめて活動したが、彼らを突き動かしていたのは、「健全な肉体にたいする純真な喜び」を抑圧する偽善的な態度への反発であった。機関誌『ドイツ裸体文化』に掲載された宣言文は、「不法な道徳審判者と嘘つきの純潔唱道者」を槍玉に挙げた宣伝大臣ゲッベルスの論説を引用しながら、「教会と小市民の黒幕」、「黒と青の反動、知ったかぶり屋、あらさがし屋、時代遅れの人間の攻撃」を非難し、みずからの目的および課題として、「血と土と結びついた自然に即した肉体教育による民族育種の奨励」を掲げている²⁶⁾。裸体文化に関するある解説書はさらに、性欲を自然な衝動として肯定し、これを抑圧する「上品ぶり」に攻撃の矛先を向ける。

上品ぶりは今日人間の全生活を支配しており、それは……肉体と性的な事柄にたいする純真なまなざしと無害な感覚を奪い、全領域を好色さにゆだねた。……性欲と官能は、他のあらゆる純朴な性質と同様に、人間のすばらしい神聖な天賦の資質である。……それゆえ、われわれはいかなる上品ぶりにも全力で立ち向かい、本当の純潔をこれに対置しなければならない。

こう述べる論者は、自然な本能を抑圧する「狂信的な厳格主義」にも、純朴な感覚を墮落させる「奔放な恣意」にも反対し、「上品ぶりと粗野な官能性の間」の「無垢な純潔性」を要求する。「自然なものを自然に、単純に、無害に扱う」ことこそ、「健全で自然な人間」のとるべき態度だというのである²⁷⁾。別の論者によれば、「裸の人間の肉体への喜び」を抑圧する「息苦しい小市民的な道徳」は、民族教育にとっても有害であった。「性のちがいを強調するあらゆる指標を不純で罪深いものとして隠すべきだとなおも考えている者は、自分自身の生の領域を汚しているだけでなく、その民族の精神を性と生殖という事実をめぐる過度の曖昧さによって害している」。むしろ裸体を提示し、その美しさを楽しむことが、「民族教育の規範」、ひいては「人種的選別的手段」となるものだという。

心身が健康な人間は、自由な自然のなかで、異性の前でも、手足を使った楽しい遊びや肉体の隠し立てのない美しさを楽しむことが許されると考えるなら、そこには性的逸脱の危険ではなく、健康で誠実で自然な男女関係に向けた卓越した教育手段が見いだされるのであり、それは子供にも提供すべき実証済みの教育手段である²⁸⁾。

ビュックマンによれば、北方人には「異性の肉体の美しさを見ることへの憧れ」が存在するのであり、この「北方的な憧れ」が抑圧されている現状を「肉体への新しい態度」によって打破するべきであった。裸体は「人種的自明性」、「育種の観点からの必然性」であって、支配人種の育成に向けた有効な手段だということである²⁹⁾。

裸体文化の人種政策上の意義はまた、自然の治癒力とその健康増進の効用という面からも、くり返し強調された。ヴァイマル期からの裸体文化運動の主唱者の一人で、第三帝国期には親衛隊将校および帝国農民指導者の特命全権として肉体教育の指導にたずさわったハンス・ズーレンは、健康で美しいアリア人の肉体をつくりあげるために「自然の実り多い影響」を重視すべきであると説いている。「太陽、空気、日光を裸体に活用すること、堅実な生活、適切な栄養摂取、……これが『ドイツの体操』で示した生活スタイルである³⁰⁾。人種的健康の向上をめざすズーレンの見解は、ナチ党の保健政策とも親和的であった。帝国医師指導者ゲアハルト・ヴァーグナーによれば、民族の健康の指導者たる医師は治療よりも予防に傾注するべき

で、そのためにはとくに「自然とその治癒力」を積極的に活用する必要があった。「医師はもはや大学で習得した学校医学の知識の教義にのみ信頼を寄せるのではなく、自然療法、ホメオパシー、国民医学の方法にも取り組み、これらの方法に習熟するべきである」³¹⁾。「予防的健康保護」には日頃の生活習慣が重要であるとされ、健康を維持する最善の方法として定期的な日光浴や外気浴が奨励された。ヒトラー・ユーゲントの団員に課された「健康な生活を送るための十戒」には、こう記されている。「君はたえず清潔を保ち、体をケアし、運動しなければならない。日光、空気、水がそれに役立つ」³²⁾。ナチズムと裸体文化運動が、人種的に純潔で健康な民族の創出という目標を共有していたことは明らかである。

それにもかかわらず、裸体文化団体が公式に承認されることはなく、依然として流動的な状況がつづいた。その最大の原因は、治安機構のトップに君臨するハインリヒ・ヒムラーの姿勢にあった。民族育種の思想にとらわれ、自然療法にも関心を示したこの親衛隊帝国指導者は、イデオロギー的には裸体文化運動のメンバーや支持者たちと近い立場にいたが、ドイツ警察長官として、マルクス主義との関係が疑われる団体の活動をはっきりと支持することには慎重たらざるをえなかったのである。そのため、彼は当面は裸体文化を制限する政令を維持したまま、基本的にこれを黙認するという対応をとることになった。その複雑な胸中は、肉体訓練同盟の過度な自己主張にたいする彼の憤慨にあらわれている。「親衛隊帝国指導者は同盟の宣伝の仕方に憤慨している。彼はこうした卑劣な方法で名前を売り込むことができると同盟が考えているなら、同盟にたいする彼の寛容さもすぐに変化するだろうと伝えるよう指示している」³³⁾。肉体訓練同盟は再三にわたって「政令の緩和」を訴え、ヒムラーも1937年にこの問題について検討することを約束したものの、最終的な決定は引き延ばされ、政令は有効なままであった³⁴⁾。1938年には保安警察長官ラインハルト・ハイドリヒが裸体文化運動の是非に関する「包括的な覚書」をヒムラーに提案したが、その内容は公表されなかった³⁵⁾。いずれにせよ、1942年7月の「水浴の規制に関する警察指令」によって、「部外者に見られない」環境で「同性または両性の個人またはグループが……公の場で裸で水浴する」ことが許可されるまで、裸体文化運動はどっちつかずの状況に置かれたのである³⁶⁾。

もっとも、裸体文化運動が賛否入り交じった反応に直面する一方で、それが理想とする「美しく純粋な」

ヌードの描写、とりわけ写真による提示は基本的に黙認され、雑誌や書籍を通じて大量に流布することになった。そこで次に、こうしたヌードの氾濫が引き起こした問題を手がかりに、第三帝国におけるセクシュアリティのありかたを考えてみたい。

代用ボルノの氾濫

裸体文化運動の取り締まりが禁止と承認の間で揺れ動くなか、裸体文化関連の雑誌や書籍の刊行は継続した。1933年の夏には肉体訓練同盟（当時は民族主義的裸体文化闘争連合）の機関誌『ドイツ裸体文化』だけが刊行を認められ、34年8月からは『法と自由』、37年からは『ドイツ肉体訓練』の題名で継続刊行されたが、30年代半ば以降になると、裸体文化に関する書籍や双書の出版があいついだ。代表的なものだけでも、1936年末にはズーレンの『人間と太陽』の改訂版が出版され、『黒色部隊』や『フェルキッシャー・ベオバハター』で絶賛されたのをはじめ、39年にはヴィルム・ブルクハルト編集の双書『精神と美』や、ヘルマン・ヴィルケの著書『肉体を肯定せよ！』、40年にはブルクハルトの著書『肉体の喜びの勝利』や、クルト・ライヒャートのカラー写真集『肉体訓練と肉体美』などが刊行された³⁷⁾。いうまでもなく、これらの出版物には裸で水浴を楽しむ男女のヌード写真が数多く掲載されていた。

こうしたヌードの氾濫は、ナチ政権成立直後には考えにくいことだった。新政府は猥褻物を取り締まる既存の「汚物・俗悪物撲滅法」を適用して、新聞や雑誌の浄化に乗りだしただけでなく、1933年3月7日にはプロイセン司法省が次の指令を布告して、「猥褻な文書・図画・公演などの撲滅」を宣言したからである。

文書と図画の汚物の撲滅は、それがもたらしたわが民族の身体的・道徳的健康にたいする特別な危険ゆえに、最大限の力をもって進められなければならない。……官能性をあてこんで商売を営む者は、容赦ない弾圧と厳格な懲罰によってしか威嚇することができない³⁸⁾。

その後、裸体文化の意義が一定の理解を得て、関連雑誌や書籍の刊行が認められるようになっても、これらを猥褻物として非難する声はやまなかった。1930年代後半にあいついで出版された雑誌や書籍にたいしても、党や国家の関係部局からたびたび疑念が表明され



図版2 『ドイツ肉体訓練』掲載の写真（1939年第4号，第8号）
裸で水浴を楽しむ男女たちの様子。

た。出版物の検閲を担当する帝国著述院の係官は、1940年にこう報告している。

裸体文化のモットーのもと、最近ふたたびいわゆる裸体文化に関する本や雑誌の出版が増えている。これらの本や雑誌はたいへん非常に多くの写真を掲載している。裸の写真がこれらの本や雑誌の売れ行きにとって決定的といえないまでも、重要である。これらの写真集には特別な文化的ないし理想的な思想が認められない。というのも、その写真はむしろ趣味が悪く、あやしげなロマン主義を提示しているからである。

出版物のなかには、「まぎれもなくキッチュで趣味を墮落させるような、その影響においても疑いなくきわめてネガティブなパンフレットや本」が見られたが、そこではしばしば「エレガントな女性のタイプ」が描写され、「巧みなアトリエ写真、とりわけ寝室や脱衣シーン」までもが提示されていたという。係官によれば、その販売方法からして、これらの本や雑誌はいかがわしいものにちがいがなかった。「このような出版物がもっぱら駅や新聞スタンド、文房具屋などで販売さ



図版3 雑誌スタンド（1941年）
裸体文化雑誌がならんでいるのがわかる。

れている事実からして、この販売においては何らかの理想的な観点が支配しているのではなく、単に好色家をあてこんだ思惑が決定的影響を与えていることは明らかである」³⁹⁾。

帝国青年指導部もまた、裸体文化の一見理想的な外観の裏側に、商売人のいかがわしい思惑を見いだしていた。

新聞や書籍の記事や写真は、以前から顕著に公然と性的な事柄を取り上げている。本、雑誌、とりわけ写真誌には、ヌード写真が多数掲載されている。これらの出版物はもちろん、まじめを装った見せかけのもとに発行されている（「北方的」肉体文化の宣伝や写真技術の入門書など）。……そのような写真や記事を掲載する理由は、たいていの場合、売れ行きと利益の上昇をもとめる努力にほかならない。新たな『裸体文化時代』に寄与する雑誌、写真誌、ダンスなどの公演の洪水は明らかに、国民に真の芸術と高貴な肉体文化を提供しようとする意図に由来するのではなく、組織時代のユダヤ的・物質主義的な精神といかがわしい類似性をもつ商売精神に由来するものである。

この報告は、ヌード写真の供給源として裸体文化雑誌と写真技術入門書の二つを挙げ、それらが無害さを装いながら事実上ポルノとして普及し、青少年に悪影響を及ぼしていることを問題にする。「いずれにせよ、それらはほぼ無制限に若者の手に入ることによって、はかりしれない危険をもたらしている。駅の雑誌キオスクを一度のぞいてみれば、若者も裸体文化雑誌まですべて購入できることがわかる。未熟な若者にたいしてそのような表現がどんな影響を与えるかは、示唆するだけで十分である」⁴⁰⁾。

ライン地方の青少年局の報告によれば、ヌード写真が掲載された雑誌は「道徳的領域における青少年へのさらなる危険の源泉」であり、そうした出版物の蔓延と青少年への墮落的影響を防止するため、ヒトラー・ユーゲントと連携して警察的措置をとる必要があった。注目されるのは、ここでは「商売上の目的のためにエロティックな描写がまったく公然と利用されている写真誌」はもちろん、『ドイツ肉体訓練』や『精神と美』のような「大人の観点からはあまり異議が唱えられない」雑誌についても、「思春期の若者への悪影響を考慮すると、公に提示したり、街頭の雑誌スタンドで販売することは、とくに今日においてはまったく望まし

くない」とされていることである。「若者の不安定な精神的状況にたいして、これらすべての出版物は、個々のちがいににもかかわらず、写真素材と文章の傾向によって性を刺激し、羞恥心をなくすように作用している」というのである。しかもそのような雑誌が出版されていることじたい、「党と国家の権限をもつ部局の承認を受けており、それゆえ安心して受け入れてもよい」という誤ったシグナルを送ることになる。報告は、裸体文化雑誌が「写真素材の普及のための安い婉曲的手段としてしか見なせない」ものであるとして、「ヌード雑誌が少なくともショーウィンドーから撤去され、写真誌にいつものヌード写真が掲載されないようにすることが、若者の道徳的健康維持の目的にかなうだろう」と主張している⁴¹⁾。

裸体文化関連の出版物が「北方的理想」を隠れ蓑にした商売目的の猥褻物ではないかという疑念にたいして、裸体文化団体の側はみずからの目的を明確にし、似たような出版物を発行する「商売熱心な業者」を非難することで応じようとしていた。1940年に肉体訓練同盟の出版申請が帝国著述院に却下されたとき、ビュックマンはこれに反論して同盟の努力の正当性を主張し、「残念ながら過去二年間、われわれの努力とまったく関係がない商売熱心な業者がこの領域に参入してきて、われわれの同盟の目標を危険にさらすようないかがわしい出版物を市場に氾濫させている」と非難している。彼が名を挙げているのは、双書『精神と美』を発行していたヴィルム・ブルクハルトであった。「彼らはわれわれから理念を盗み、そこからいかがわしい冒険を行った。彼らは見せかけだけ民族的な生活や育種について語りながら、子供に関心をもたず、子供を産む気がなく、それゆえ真の育種にまったく貢献しないエレガントな女性のタイプを、見え透いた理由で描写の対象にしている」⁴²⁾。

裸体を提示した写真集や写真入門書の著者たちもまた、ヌードを享楽の対象とすることに異議を唱え、「北方の人生観」や「健全で自然な肉体感情」の意義を強調していた。ある写真集の序文によれば、裸体の「覆いをとった美しさ」は「その生气によって、またその官能的だがよき趣味の限界をこえない上品な形態によって時代の趣味の変動を超越」し、「あらゆる不自由でひどい本能の蔓延」、つまり「ポルノグラフィ」に対抗するものだった。そこには「レビュー・ガールの厚顔無恥なむきだしの肉体」とは正反対の「自然な優雅さと美しさ」があり、「裸」に感じられるのは「空虚な写真の魂のない人間」だけだという⁴³⁾。別

の写真入門書の著者は、「私はナイトクラブのメンバーではないし、不適切な場所で服を脱ぐように読者やわが国民を諭すつもりもない。だがそれを適切な場所で行う者は、俗物や偽善者を気にせずにそうできるべきである」と述べ、裸とヌードを混同する「偽善者」にたいしては、「あらゆる点で申し分のない、すぐれたヌード写真を創造する」ことによって対抗するしかないと主張している⁴⁴⁾。

とはいえ、こうした裸とヌードを区別しようとする努力にも、読者の下卑た欲求に迎合する姿勢が透けて見えていた。同じ写真入門書は、よい写真を撮るには「あらゆる点で——体つきに関してだけでなく——申し分のないモデルが必要である」として、モデル選びの重要性を次のように説明している。

ヌード写真において最も重要なのはモデルであり、同時に最大の問題でもある。……いまこのグループのなかに欠点のない女性を見つけて、モデルをやってもよいといったとしても、彼女が服を脱いだとき、服を着ていたときには気づかなかった欠点が示されるかもしれない。このことは、とくにバストにあてはまる——それまで申し分なく見えていたのに、それはもっぱらよい形のブラジャーによるものだったというわけである⁴⁵⁾。

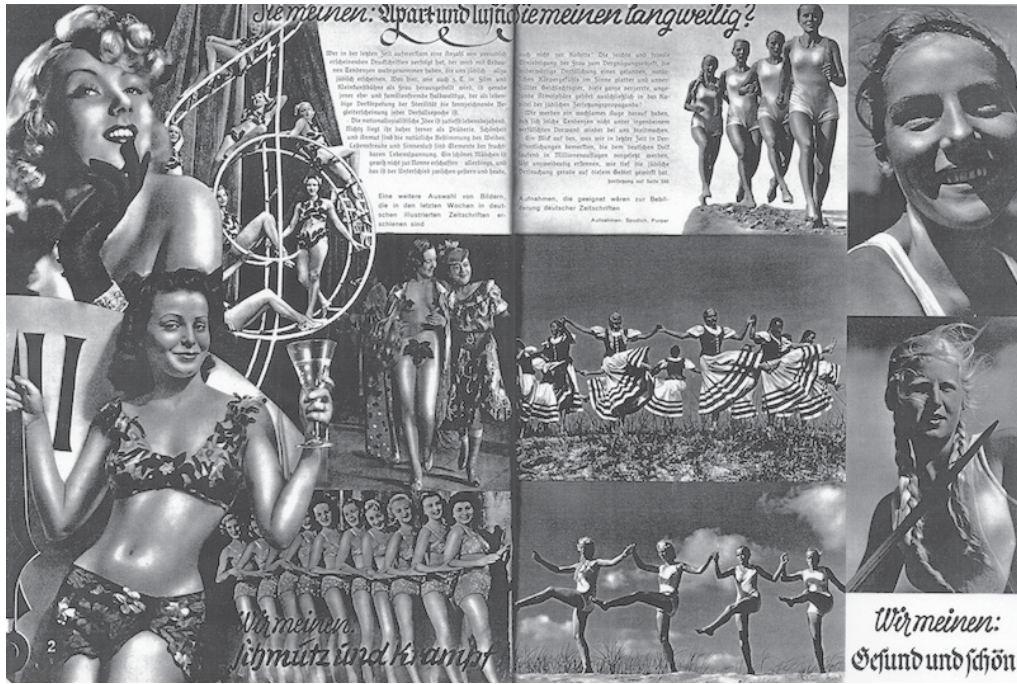
このような扇情的な出版物が、ポルノのない「清潔な帝国」において、ポルノの代用品となった可能性は否定できない。しかも、そうした「代用ポルノ」は裸体文化関連の雑誌や書籍にとどまらなかった。帝国青年指導部の報告は、「残念ながら日刊紙や絵入り新聞もまた、おそらくしばしば意図せずにせよ、そのような事柄と無関係ではない」と指摘している。事実、『ベルリン絵入り新聞』にはほぼ毎号、映画や舞台の刺激的な女性の写真が掲載され、露出度の高い衣装を着た女性や上半身裸の女性が、男性読者に秋波を送っていた。帝国青年指導部の報告によると、生徒の一部は若者の恋愛の詳細を報じた『ハンブルク日刊新聞』や、イギリスのナイトクラブの写真が掲載された『ミュンヘン絵入り新聞』の記事の切り抜きをまわし読みしていたという。報告はさらに映画や舞台にも言及している。「同じことは多くの映画にもあてはまる。とりわけエロティックに脚色された犯罪映画と社会映画が大きな悪影響を及ぼしている。……裸ないしベールをまとったダンスも若者に影響を与えずにはおかない。この種の演目は、それなしには公演がほとんど考えら



図版4 『ベルリン絵入り新聞』掲載の写真
(1942年第36号)
映画『ミュンヒハウゼン』の水浴シーンの紹介記事。

れないほど普及している。この演目の影響は、裸のダンスが当該のダンサーの裸の写真の掲示を通じて外部の若者に知られることで、さらに増幅されている⁴⁶⁾。映画にはしばしば上半身裸の女性が登場し、刺激に飢えた観客の人気を集めたが、とくに人気が高かったのは、肌を露出したダンサーが登場するレビュー映画だった。しかも異国を舞台にした映画の場合、裸体の提示にはほとんど規制が入らなかった。たとえば1943年に華々しく公開されたカラー映画『ミュンヒハウゼン』には、スルタンのハーレムで美しい女性たちが裸で水浴びをするシーンが含まれている。性欲を喚起する艶かしい裸体も、異国の空の下ではまったく問題のないものとされたのだった。

親衛隊保安部は、こうした状況を憂慮をもって見ていた。「芸術の領域ではリベラリズムの影響が強まっている。……映画とヒット曲はふたたびますます内容のない、もっぱらエロティシズムを志向する組織時代の陳腐さに陥っている⁴⁷⁾。保安部がとくに危険視していたのは、裸を見ようとする若者の「映画熱」、各地の若者たちが「犯罪映画や青少年観覧禁止の恋愛映画の上映に押しかけている」ことだった⁴⁸⁾。「『夜間上映』として相応の広告とポスターで告知された『啓蒙映画』は、観客にとってナチズムの民族生物学的思考に必要なザッハリヒな知識を指示するものというより



図版5 『ナチ女性監視人』の記事（1939年2月号）
「汚く不自然な」女性と「健康で美しい」女性の対比。

もむしろ、性的センセーションをもとめる衝動を喚起するものとなっている」⁴⁹⁾。党のお墨つきの映画までもが扇情的な効果を発揮しているというのだが、この皮肉な事態は何よりも、ナチズムによる「生の肯定」——そして「偽善的な上品ぶり」への批判——が多くの国民に「不潔な見解の認可状」と受け取られたことに原因があった。そう推察する党公認女性雑誌『ナチ女性監視人』の記事は、肌を露出した艶かしいキャバレーの女性とスポーツや踊りを楽しむ健康な女性の写真を対比しつつ、「ドイツ国民に現在数百万部提供されている最近の出版物」に深く巢食っている「ユダヤ人の汚染」を声高に非難する。

ここにあるのは……まさにあの結婚と家族とは縁のない高級娼婦のタイプであり、それは不妊症の生きた化身として、あの崩壊時代の特徴的な随伴現象だったものである。ナチズムの理念は根底から生を肯定するものである。したがって、上品ぶりほど縁遠いものはない。美と優雅さが女性の自然の宿命である。生の喜びと官能的喜びは実り豊かな生の緊張の要素である。美しい娘はたしかに修道女になるために創造されたのではないが、もちろん……売春婦になるためでもない！ 女性を慰み物へと浅薄かつ軽薄におとしめること、まったくのあからさまな性欲という意味で、健全で自然な肉体感情を不快に歪

曲すること、これらすべての歪んだ不健全な雰囲気は、もっぱらユダヤ人の破壊的プロパガンダの一部なのだ！ そのような傾向が何らかの偽りの口実のもとでふたたびのさばることがないように、われわれは怠りなく監視するつもりである⁵⁰⁾。

「修道女」と「売春婦」——つまり「上品ぶり」と「あからさまな性欲」——をともに非難しつつ、両者の間に位置づけられるべき「生の喜びと官能的喜び」を擁護するこの記事は、「健全で自然な肉体感情」をもった支配人種の育成をめざすナチズムの——そして裸体文化運動の——おきまりの主張を踏襲している。だが裸体文化運動への理解が進まなかったことからわかるように、これは一般人にはなかなか理解しにくい主張だった。「健康で美しい」女性と「汚く不自然な」女性を対比したところで、両者とも性的な魅力を発散していることにはかわりはなく、多くの人々は裸の写真とあらば何にでも飛びついたからである。『黒色部隊』の記事が認めているように、「純粋さと露呈、裸体性と破廉恥な露出といった根本的に異なる概念を対立するものと見なすことができない」連中が多かったし、何をもってこれらの概念を区別するかの基準も曖昧だった。「許されるものと許されないものの境界は必ずしもつねに明確に決められておらず、しかも越境を管理することは一般に困難であるため、この境界

領域はきわめて危険にさらされている⁵¹⁾。「美しく純粋な」裸体は、これを理想としたナチ党組織や裸体文化団体のメンバーたちの意図にかかわらず、一般大衆の性的関心を刺激した。「生の喜び」は容易に「あからさまな性欲」と混同され、その混同の上に大量のヌードが生みだされたのだった。

こうしたヌードの氾濫は、党や国家の係官には嘆かわしいことだったかもしれないが、必ずしもナチズムのめざす目標と矛盾するものではなかった。最後に、その点を考察することで、第三帝国におけるセクシュアリティの位置づけを明確にしておきたい。

おわりに

「健全なる民族感情」の代弁者をもって自認したヒトラー自身、疑いなくヌードの氾濫を黙認し、奨励すらしていた。ナチ党公認の大ドイツ芸術展にはポルノまがいの女性のヌード画が数多く出展され、「恥毛の巨匠」の異名をとっていたアドルフ・ツィーグラの『四元素』や、パウル・マティアス・パドゥアの『レダと白鳥』など、露骨なヌード画が一大センセーションを巻き起こしたが、ヒトラーはこれらの作品を気に入って買い取り、邸宅の居間に飾らせたという⁵²⁾。とはいえ、裸体の賛美はヒトラー個人の趣味の問題ではなく、国民を動員するための誘因の提供という目的も含んでいた。「ドイツの男が兵士として無条件に死ぬ覚悟をするためには、無条件に愛する自由も与えられなければならない」と考えるヒトラーは、ヌード画を通じて「健全な生の喜び」を発散させる必要をこう説明している。「前線から帰ってきたとき、彼らは美しい造形に感嘆して嫌なことをすべて忘れたという肉体的欲求をもつものだ⁵³⁾。このような考えは、戦時には軽い娯楽をという宣伝省の方針にも反映されていた。もちろん、ナチズムによる官能性の肯定は、性を敵視するキリスト教の姿勢、とりわけその「上品ぶり」への批判と結びついていた。ヒトラーは、「兵士の戦闘力を保つのに、性愛の禁欲を命じる教会の戒律など無用である」と述べ、「美の喜び」を抑圧する宗教を奉じていることこそ、ドイツ人の「不幸」にほかならないと主張する⁵⁴⁾。『黒色部隊』によれば、「健全なドイツ人にとって、純粋で美しいものが罪であったことは一度もない」のであって、「わが民族の肉体的高貴さと美への本能」を衰退させたキリスト教の偽善的な教えは、断固として排撃されるべきものだった⁵⁵⁾。

だが他方でナチズムは、たえずみずからを「純粋」

で「清潔」な道徳の守護者として提示し、ヌードやポルノを蔓延させたとして、ユダヤ人やヴァイマル共和国の道徳的退廃を非難した⁵⁶⁾。『黒色部隊』が敵視していたのは、「結婚や家族のような自然な秩序」を破壊しようとする「ユダヤ人の黒幕」であったが、『ナチ女性監視人』はさらにはっきりと、ナチズムは「女性の品格と名誉、結婚・家族・子供の幸福」などといった「わが民族・人種の最も高尚な道徳的価値をめぐる闘争」であり、「道徳的退廃、だらしのない道徳観、いらいらさせる生活形態によって、ドイツ民族の内的な力を永久かつ致命的に衰弱させる」ユダヤ人の卑劣な策動への闘争であると宣言している⁵⁷⁾。要するにナチズムは、社会生活にはびこるエロティシズムをユダヤ人の責任に帰することで、彼ら自身がそれを促進していた事実を曖昧にしていたのである。ハンス・ペーター・ブロイエルが的確に指摘しているように、「そこで支配的だったのは、自分の小市民的な道徳律の帰結を拒否しながら、その狭い柵の外にいる他の人々を大量虐殺するときにも慎みのことを語るという、俗物の非道徳性であった⁵⁸⁾。教会の偽善を非難し、新たな道徳を擁護したナチズムじたい、もっと深刻な偽善に陥っていたといえよう。

いずれにせよ、第三帝国下の国民が直面することになったのは、欲望の発散を奨励されながらも、その自由な発散を禁じられるというダブルバインド状況だった。これは少なくとも次のことに役立った。すなわち、人々の関心をたえず性的問題に引きつけ、彼らを操作可能な状態にとめおくことである。崇高なヌードと猥褻なヌードの区別を曖昧にしたまま、そこに欲望を誘導して操作することこそ肝心な点であり、これによってはじめて裸体は有効な人種教育の手段となりうるのだが、その具体的なメカニズムについては、人口・人種政策とのかかわりも含めて、別稿で論じることにした⁵⁹⁾。

注

- 1) Hinkel an v. Arent vom 27. Oktober 1938, in: Joseph Wulf, *Theater und Film im Dritten Reich. Eine Dokumentation*, Frankfurt/M. 1983, S. 29-30.
- 2) *Berliner Illustrierte Zeitung*, 1942, Nr. 36; 1943, Nr. 42などを参照。
- 3) 親衛隊機関紙『黒色部隊』が「美しく純粋な」ヌードを擁護していた事実については、すでにハンス・ペーター・ブロイエル、ダクマー・ヘアツォークらの指摘がある。Hans Peter Bleuel, *Das saubere Reich. Die verheimlichte Wahrheit. Eros und Sexualität im Dritten Reich*, Bern/München 1972 (ハンス・ペーター・ブ

- イエル, 大島かおり訳『ナチ・ドイツ 清潔な帝国』人文書院, 1983年); Dagmar Herzog, *Die Politisierung der Lust. Sexualität in der deutschen Geschichte des zwanzigsten Jahrhunderts*, München 2005. 両者とも裸体文化運動の影響についてはほとんど考察していないが、『黒色部隊』の記事についてすぐれた分析を行っている。
- 4) *Das Schwarze Korps*, 20. Oktober 1938.
 - 5) *Das Schwarze Korps*, 24. April 1935.
 - 6) *Das Schwarze Korps*, 16. April 1936.
 - 7) *Das Schwarze Korps*, 20. Januar 1938.
 - 8) *Das Schwarze Korps*, 16. April 1936.
 - 9) *Das Schwarze Korps*, 20. Januar 1938.
 - 10) *Das Schwarze Korps*, 24. April 1935.
 - 11) *Das Schwarze Korps*, 25. November 1937.
 - 12) *Das Schwarze Korps*, 16. April 1936.
 - 13) ここで留意したいのは、「裸体文化」をさす言葉には「Nacktkultur」と「Freikörperkultur」の二つがあり、前者が裸体の提示を非難する場合など、主として否定的な意味合いでもちいられたのにたいし、後者が裸体文化運動の支持者たちによって、みずからの理念や目標を示すため、もっぱら肯定的な意味合いでもちいられたことである。とはいえ、「nackter Körper」や「Nacktheit」といった言葉も裸体の崇高さをあらわすのにもちいられ、使用頻度も高かったことから、「nackt」という形容詞じたいは価値中立的で、必ずしもネガティブなニュアンスを含むものではなかったと考えられる。
 - 14) *Das Schwarze Korps*, 20. Oktober 1938.
 - 15) *Das Schwarze Korps*, 17. Dezember 1936
 - 16) 第三帝国における裸体文化運動の状況については、とくにチャド・ロスの研究を参照。Chad Ross, *Naked Germany. Health, Race and the Nation*, Oxford/New York 2005. 本章で引用する文書館史料の多くは、同書の指示にもとづいて入手したものである。そのほか、以下の研究も参照。Dietger Pforte, „Zur Freikörperkultur-Bewegung im nationalsozialistischen Deutschland“, in: Michael Andritzky/Thomas Rautenberg (Hrsg.), „Wir sind nackt und nennen uns Du“. Von Lichtfreunden und Sonnenkämpfern. Eine Geschichte der Freikörperkultur, Gießen 1989; Ulrich Linse, „Sonnenmenschen unter der Swastika. Die FKK-Bewegung im Dritten Reich“, in: Michael Grisko (Hrsg.), *Freikörperkultur und Lebenswelt. Studien zur Vor- und Frühgeschichte der Freikörperkultur in Deutschland*, Kassel 1999.
 - 17) Runderlaß des Preußischen Ministers des Innern vom 3. März 1933 II D 31, in: *Ministerialblatt für die Preußische innere Verwaltung*, Nr. 13 vom 8. März 1933.
 - 18) 警察はたとえば、裸体文化団体が借りた土地の所有者に借用契約を無効にするよう圧力をかけたり、自治体に施設を使わせないよう指示したりすることで、活動の機会を奪った。また裸体文化団体の催しも、参加者の多さが公序良俗を乱すとして禁止された。Abschrift II 1768/28.5.II, in: Staatsarchiv Hamburg (以下「SAH」と略記), 136-2 Sportamt 81. プロイセン以外でも、たとえばアンハルトでは、「完全に裸の男女が公の場で自由にうろつきまわり、それによって公の怒りを喚起すること」が問題視され、警察当局に裸体文化運動の取り締まりが命じられた。Anhaltisches Staatsministerium an die Kreispolizeibehörden vom 9. Mai 1933, in: SAH, 136-2 Sportamt 81.
 - 19) Der Reichssportführer an den Reichsminister des Innern vom 22. Feb. 1934, in: Bundesarchiv Berlin (以下「BA」と略記), R1501/126337. なお、この史料には裸体文化運動の歴史が概説されている。それによれば、裸体文化運動はディーフェンバッハ、フィードゥス周辺の芸術的・美的サークルに由来するもので、第一次大戦前に青年運動の民族主義的グループによって勃興し、リヒャルト・ウンゲヴィッターによって1911年に最初の団体が設立された。大戦後の諸団体も一般に民族主義的青年運動から発生したが、その活動が広く知られるようになったのは、1920年代のハンス・ブーレンの著作によってであった。一方、これとほぼ同時期に活動をはじめたアドルフ・コッホは、それまでの団体とはちがってマルクス主義的・共産主義的に運動を展開し、政府、とりわけプロイセン内務省による攻撃を受けたため、「『裸体文化』は純粹にマルクス主義的で非ドイツ的な事柄である」との印象を与えることになった。この間、他のグループは裸体文化帝国連盟の前身を形成したが、平和主義的・自由主義的傾向を強めたため、反対が生じた。その解消後に形成されたのが、ナチ政権の承認を受けることになる「民族主義的裸体文化闘争連合」、後の「肉体訓練同盟」で、それは裸体文化運動初期の民族主義的な性格を濃くしていた。なお、コッホの団体は「民族・国家にとって敵対的」であるとして解体された。
 - 20) Thüringisches Ministerium des Innern vom 17. Januar 1934, in: SAH, 136-2 Sportamt 81; Der Reichssportführer an den Reichsminister des Innern vom 22. Feb. 1934, in: BA, R1501/126337.
 - 21) Karl Bückmann an Heß, Lammers, Frick, Wagner und Darré vom 27. Feb. 1934; Der Reichssportführer an den Reichsminister des Innern vom 22. Feb. 1934, in: BA, R1501/126337.
 - 22) Reichsministerium des Innern an Reichsführer-SS Persönlicher Stab vom 25. Mai 1939, in: BA, NS19/1152. この裸体文化映画『自然な肉体教育』は、裸の男女のメンバーの活動を紹介したもので、帝国映画検閲局によって「民族教育的」と判定され、1930年代末にビュックマンの同伴でドイツ各地で上映された。ヒムラーは上映された映画に関心を持ち、同じものを送るよう要求している。SS-Standartenführer Ullmann an SS-Obergruppenführer von Eberstein vom 31. Juli 1939, in: BA, NS19/1152.
 - 23) Der Reichssportführer an den Reichsminister des Innern vom 22. Feb. 1934, in: BA, R1501/126337.
 - 24) Groß an den Reichssportkommissar vom 7. Juni 1934, in: Landesarchiv Berlin, A Pr. Br. Rep. 030-04 Nr. 782.
 - 25) Karl Bückmann an Heß, Lammers, Frick, Wagner und

- Darré vom 27. Feb. 1934, in: BA, R1501/126337.
- 26) *Deutsche Freikörperkultur*, Jg. 1934, H. 2, S. 19.
- 27) Hermann Wilke, *Dein „Ja“ zum Leibe. Sinn und Gestaltung Deutscher Leibesucht*, Berlin 1939, S. 132-134. なお、裸体文化運動が性欲をも自然な衝動として肯定していたことは、従来の研究ではほとんど無視されている。たとえばジョージ・L・モッセは、第三帝国期の裸体文化雑誌が「裸体からそのセクシュアリティを剥ぎ取ろうとした」と指摘している。George L. Mosse, *Nationalism and Sexuality. Respectability and Abnormal Sexuality in Modern Europe*, New York 1985, S. 171 (ジョージ・L・モッセ、佐藤卓己・佐藤八寿子訳『ナショナリズムとセクシュアリティ——市民道徳とナチズム』柏書房、1996年、211頁)。
- 28) Kurt Reichert, *Von Leibesucht und Leibesschönheit*, Berlin 1940, S. 10, S. 15-16. 裸体文化を擁護する著者は、衣服を着ることによってむしろ「性生活が過度に強調され、刺激される」と述べている。衣服は文明の見せかけの価値を表現するものだというのである。
- 29) Reichsministerium des Innern an Reichsführer-SS Persönlicher Stab vom 25. Mai 1939, in: BA, NS19/1152.
- 30) „Deutsche Gymnastik“, in: *N. S. Landpost*, Nr. 40 vom 8. Okt. 1937. この点についてズーレンはまた、「結核にたいする日光の効果はとくに驚異的で、病氣治療の手段として体操が取り入れられた」と述べている。なお、第三帝国期に人種主義的傾向を強めた彼は、1920年代に広く読まれた著書『人間と太陽』の改訂版を出版している。Hans Surén, *Mensch und Sonne. Arisch-olympischer Geist*, Berlin 1936.
- 31) „Dr. Gerhard Wagners Wollen“, in: *Ziel und Weg*, Nr. 16 vom 15. Aug. 1938.
- 32) „Gesund durch Licht, Luft und Wasser“, in: *Der Mitteldeutsche*, Nr. 50 vom 20. Feb. 1937; „Zehn Gebote gesunder Lebensführung“, in: *N. S. K.*, Nr. 114 vom 13. Aug. 1939.
- 33) Reichsführer-SS Persönlicher Stab an den Bund für Leibesucht vom 15. Mai 1939, in: BA, NS19/1152.
- 34) Regierungsrat Dr. Zellmann an den Senator Richter vom 18. Sept. 1937; Senator Richter an den Bund für Leibesucht vom 13. Dez. 1937, in: SAH, 136-2 Sportamt 81. 肉体訓練同盟の活動に関するある報告は、裸体文化運動はけっして万人が行う活動ではないため、既存の団体をさしあたり認めるにしても、さらなる普及には慎重であるべきだと指摘している。Regierungsrat Dr. Zellmann an den Regierungsrat Dr. Sieg vom 12. Okt. 1937, in: SAH, 136-2 Sportamt 81.
- 35) Eiffe an das Büro von Senator Richter vom 4. März 1938, in: SAH, 136-2 Sportamt 81. この報告は、裸体文化がふたたび大規模に実践されるようになると、国家に敵対的なグループが形成されるとの疑念が払拭されていなかったことを明らかにしている。もっとも、1939年頃にはヒムラーやハイドリヒの態度に軟化の徴候が見られるようになった。1939年5月、ハイドリヒはダレーにたいして、「裸体文化にたいする自然で民衆的な態度にもとづいて、この問題を扱うことに努めるつもりである」と約束している。Pforte, *a. a. O.*, S. 141.
- 36) Polizeiverordnung zur Regelung des Badewesens vom 10. Juli 1942, in: *Reichsgesetzblatt*, Teil I, S. 461.
- 37) Surén, *a. a. O.*; *Das Schwarze Korps*, 17. Dezember 1936; *Völkischer Beobachter*, 17. Dezember 1936; *Geist und Schönheit*, Folge 1, 1939; Wilke, *a. a. O.*; Wilm Burghardt, *Sieg der Körperfreude*, Dresden 1940; Reichert, *a. a. O.* 肉体訓練同盟の機関誌については、Pforte, *a. a. O.*, S. 141を参照。
- 38) Adolf Sellmann, *50 Jahre Kampf für Volksittlichkeit und Volkskraft*, Schwelm 1935, S. 109.
- 39) Die Reichsschrifttumskammer an das Reichsministerium für Volksaufklärung und Propaganda vom 9. Sept. 1940; 25. Okt. 1940; 11. Dez. 1940, in: BA, R56/V/827.
- 40) *Kriminalität und Gefährdung der Jugend. Lagebericht bis zum Stande vom 1. Januar 1941*, hrsg. vom Jugendführer des Deutschen Reichs, Berlin 1941, S. 204-206. 報告にも注記されているとおり、この指摘は戦時青少年保護作業委員会のジーヴァーツ教授の報告にもとづくものである。「最近、ふたたび非常に増大している裸体文化雑誌、ヌード作品など。それらは残念ながら駅のキオスクにも陳列されている。私見によれば、ここでは種にふさわしい北方的生活や北方的生活理想を支持したり、アマチュア写真家のための指示を与えたりすることを隠れ蓑にして、もっぱら性欲の刺激を目的とした写真や文章が出版されている」。Arbeitsgemeinschaft zum Schutze der Jugend im Kriege 111-2649, in: SAH, 351-10I Sozialbehörde I VT 38.10.
- 41) Der Oberpräsident der Rheinprovinz vom 10. Mai 1940, in: SAH, 351-10I Sozialbehörde I VT 38.10. この報告によれば、ハンブルクの青少年当局やミュンヘンの市長からも、裸体文化雑誌の販売に苦情の声が上がっていたという。報告はまた、匿名の公衆向けの雑誌販売スタンドによって、若者グループ内での普及が強くと促進されていると指摘している。
- 42) Karl Bückmann an die Reichsschrifttumskammer vom 22. Aug. 1940; 4. Sept. 1940, in: BA, R56/V/827.
- 43) *Enthüllte Schönheit. 15 Lichtbild-Kunstblätter*, Stuttgart o. J. この写真集は、肉体訓練同盟のカラー写真集『肉体の美』などとともに、センセーションとなった。*Schönheit des Leibes. 12 Kunstfarbblätter aus dem Leben des Bundes für Leibesucht*, Berlin o. J. また、Reichert, *a. a. O.*の序文も参照。
- 44) Othmar Helwich, *Der Freilicht-Akt. Neue Wege der Lichtbildkunst*, Wien 1940, S. 20, S. 50. 筆者はまた、「純真な裸体への自然な感情を誰もがもっているなら、裸の石像に服を着せたり、襦袢令を出したりするよりも、道徳と風紀にとっていいことではないか」と問いかけている。なお、ここで言及されている「襦袢令」とは水着に襦袢を入れるよう規定した政令で、1932年にプロイセン内務省が発令したものである。

- 45) Helwich, *a. a. O.*, S. 18, S. 21. 筆者によれば, バストの形が悪い場合には前屈みの姿勢をとるなどして, 撮影の際にそうした欠点を目立たなくすることが可能であった。同書はまたモデルとの「有益な協力」の必要性を説いているが, この点は別の写真入門書でも強調されていた。Walter Thiele, *Aktfotos. Die jeder kann*, Halle (Saale) 1940, S. 7. これによると, モデルの協力を通じて「体を完全に知ること」, 「モデルの体を最も繊細な神経繊維まで感じとることを学ぶ」ことが必要であった。
- 46) *Kriminalität und Gefährdung der Jugend*, S. 206-208.
- 47) *Meldungen aus dem Reich. Die geheimen Lageberichte des Sicherheitsdienstes der SS 1938-1945*, hrsg. von Heinz Boberach, Herrsching 1984, Bd. 2, S. 71.
- 48) *Meldungen aus dem Reich*, Bd. 4, S. 977-978.
- 49) *Meldungen aus dem Reich*, Bd. 3, S. 712.
- 50) *NS-Frauenwarte*, H. 17, 7. Jg. (1939), 2. Februar-heft.
- 51) *Das Schwarze Korps*, 25. November 1937.
- 52) Reinhard Müller-Mehlis, *Die Kunst im Dritten Reich*, München 1976, S. 16-21.
- 53) Henry Picker, *Hitlers Tischgespräche im Führerhaupt-quartier*, Berlin 1993, S. 332; Albert Zoller, *Hitler privat*, Düsseldorf 1949, S. 52.
- 54) Picker, *a. a. O.*, S. 108, S. 333. ヒムラーもまた, 一夫一婦制の結婚を「カトリック教会の悪魔的な所産」と呼び, 結婚に関する教会の規則を「非道徳的」と見なしていた。Felix Kersten, *Totenkopf und Treue. Heinrich Himmler ohne Uniform*, Hamburg 1952, S. 224.
- 55) *Das Schwarze Korps*, 24. April 1935.
- 56) ヘアツォークは, このような矛盾した姿勢がナチズムの性政策に特徴的だったと指摘している。Herzog, *a. a. O.*, S. 50.
- 57) *Ebd.*; *NS-Frauenwarte*, H. 17, 7. Jg. (1939), 2. Februar-heft.
- 58) Bleuel, *a. a. O.*, S. 13-4 (邦訳, 11頁).
- 59) さしあたり, 著者の既発表の論考を参照。田野大輔「愛と欲望のナチズム」姫岡とし子・川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店, 2009年; 同「子供にそのことを話しましょう! ——第三帝国における性的啓蒙の展開をめぐって」『ゲシヒテ』第1号, 2008年; 同「性生活の効用——精神療法とナチズムの関係をめぐって」『思想』第1013号, 2008年。